

「道の駅」を利用したかほく市の魅力発信プロジェクト —「安心・安全・健康」の地元特産品の創出—

指導教員：石川県立看護大学看護学部 准教授 垣花 渉

参加学生：荻野公明・松本美鈴・渡辺達也, ほか 6 名

1. 調査研究成果の要約

「安心・安全・健康」の地元特産品の創出を通じて「道の駅高松」を活性化させるため、将来地域の保健や福祉の中核を担う看護大生は地域住民と連携して、道の駅の実態調査とともに、道の駅へ人を呼び込むためのスイーツを開発して販売した。その結果、地場農産物のヘルシーなスイーツは道の駅へ観光客を呼び込める可能性が高いことを明らかにした。今後の課題は、特産品を売り出すための地域連携の仕組みを整えることであった。

2. 調査研究の目的

(1) 調査研究の背景

かほく市は、上山田貝塚や大海西山遺跡を代表とする縄文・弥生集落跡の「歴史」、哲学の西田幾多郎、川柳の鶴彬、飛行家の東善作等の偉人を輩出した「文化」、果実、農作物、味噌、押し寿司等の「食」の豊かな地域資源を有している。しかしながら、このような地域資源は必ずしも有効活用されていないため、かほく市の知名度・認知度は決して高くはない。

そのため、県立看護大学はかほく市商工会、JA 石川かほく、NPO 法人クラブパレット等の地域団体と連携して、市内の地域資源を来訪者に体験いただくことを通じて交流人口の拡大を図っている。私たちゼミでは、2008 年度から地域課題研究ゼミナール支援事業を活かし、名所や旧跡、遊びや癒しの拠点、食を堪能する店等を巡る「かほく市ウォーキングツアー」や、スポーツ、文化・歴史、地場産業、農業・食等の地域資源を来訪者が体験しながら住民と交流を図る「かほく自然塾」を試行している。併せて、手軽でヘルシーな地場産物の料理を県内の食イベントで売り出している。これらの取組を通じて、私たちゼミでは「健康」をキーワードに来訪者と住民の交流を図ることがかほく市の活性化に不可欠であることを提起している。

(2) 調査研究の目的及び達成目標

私たちゼミは、かほく市商工会よりこれまでの実績をふまえて以下の課題解決への取組を依頼された。「平成 25 年 4 月に能登海浜道路の無料化に伴い交通量の倍増が予想される。人と人の交流拠点である道の駅の活用方法を提案頂きたい。そのためには、道の駅が持つ 3 つの機能（休憩、情報発信、地域連携）を検証するとともに、かほく市らしい個性ある道の駅を提案頂きたい。」

したがって、私たちゼミは以下に示すような調査研究の目的と今年度の達成目標を設定した。

目的：「安心・安全・健康」の地元特産品の創出を通じて道の駅を活性化すること

達成目標：

1. 道の駅の利用に関する実態調査
2. 地元特産物を活かしたスイーツの創作
3. 地元住民を道の駅に呼び込むイベントの立案

3. 調査研究の内容

(1) 道の駅の利用に関する実態調査

調査の目的を、道の駅の立地条件がその利用に及ぼす影響を明らかにすることとした。「道の駅高松」は能登有料道路沿いにあるため、高速道路のサービスエリアと類似した機能（通過客の休憩所）を有するものと仮説を立てた。これに対して、観光の名所や施設に隣接する道の駅または中心市街地や郊外にある道の駅は、通過客の休憩所とは異なる機能を有するものと推察された。そのため、「道の駅高松」の利用の属性や目的等に関する聞き取り調査を行うとともに、立地条件の異なる中心市街地にある「ころ柿の里しか」、観光地に隣接する「千枚田ポケットパーク」、中心市街地と観光地を併せ持つ「海鮮館」等の道の駅と比較した。調査時期を、道の駅の集客数が最も多いお盆シーズン（8月14日～16日）とした。

8月14日13時から15時に「道の駅高松」へ、15日9時から11時に「ころ柿の里しか」へ、15日12時から14時に「千枚田ポケットパーク」へ、16日10時から12時に「海鮮館」へ出向いた。学生6名は、図1に示すように、調査内容を記したアンケート用紙を持って道の駅の来客者へ聞き取り調査を行った。1回の調査時間を3分程度とし、できる限り多くの意見を伺うとともに来客者の邪魔にならないことを心がげた。併せて、学生1名は道の駅のオーナーに対して、①集客数を上げるための工夫、②自慢できる点、③将来の経営目標についてインタビューを行った。

(2) 地元特産物を活かしたスイーツの創作

かほく市は、ぶどう、柿、さつまいも、長いも、大根を市の特産物としているが、それらの知名度は必ずしも高くない。私たちゼミは、これまでかほく市の農作物に付加価値をつけることを目指し、さまざまな料理を考案している。一方、石川県は県民一人当たりの和菓子やアイスクリームの消費量が全国1位である。そこで、地場の農作物を活かしたヘルシーなスイーツを創作し、「健康な町」をキャッチフレーズにするかほく市のイメージアップにつなげることを目指した。

まず、県内の和菓子にまつわる文化や歴史の文献学習を行った。

- ・ 歴代前田家藩主が茶道文化を推奨したことが石川の和菓子文化の礎を築いた。
- ・ 湿気の多い石川県特有の気候条件が和菓子の味（砂糖を多く使った甘み）を作った。
- ・ 石川県は浄土真宗の信仰者が多く法事が盛んに行われたため、和菓子は庶民の文化に広く根付いた。

次に、地産地消の和菓子創作で知られる小松市の山上福寿堂へ訪問し、ヘルシーなスイーツを創作したい旨を伝え、和菓子創作の重要な視点を教示いただいた（図2）。

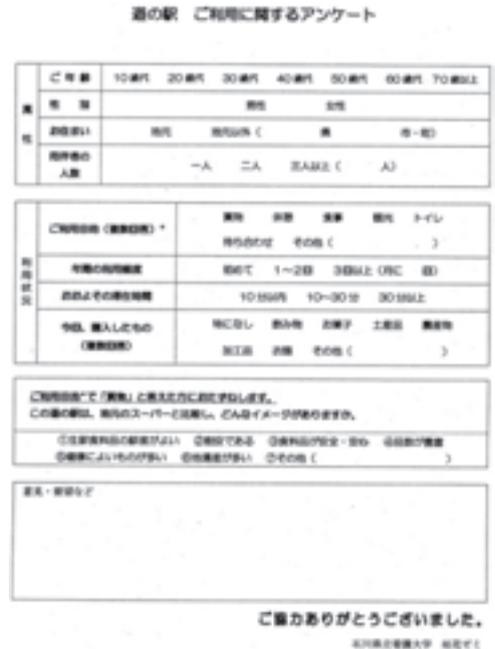


図1. 調査用紙（上）と調査の様子（下）



図2. 和菓子職人への聞き取りの様子

- ・ 素材, 味, 彩りなど焦点を当てる項目を明確にすること。例えば, 素材であれば健康によいモノを使うのか, または珍しい食材を使うのかなど創作の目的に応じて食材を吟味することが重要である。
- ・ どこにでもある和菓子は売れない。人の印象に残る和菓子を創作することは売れ行きにつながる。
- ・ 売れない和菓子を作った場合, 売れなかった理由を充分考える。消費者の意見に真摯に耳を傾けることは大切である。特に, 満足でない回答の理由を聞き出すことは売れる和菓子を作るヒントになる。
- ・ 原価計算 (食材費+利益=原価) をしっかり行い製品化の行程を明確にする。



図3. さつまいも餡の創作の様子

調査に基づいて, さつまいも, かぼちゃ, ぶどう等の味・色・食感を活かしたスイーツの開発に取り組んだ (図3)。課外活動の時間を使って試作を繰り返し, 管理栄養士の助言を受けて完成度を高めた。

(3) 地元住民を道の駅に呼び込むイベントの立案

道の駅の集客数を増やすためには, 地元住民の理解と協力は不可欠である。しかし, 「道の駅高松」は有料道路沿いの郊外にあるため住民はほとんど訪れない。このような場所に住民を呼び込むためには, 地元の大学と農や商の団体とが連携して, 「道の駅高松」を地元全体で応援する「おらが道の駅」構想が重要となる (図4)。

私たちゼミは, 市商工会と「道の駅高松」に働きかけ, 地場の農作物を使った料理やスイーツの創作・販売を通じて, 地元住民が道の駅を訪れるきっかけを作る「特産品市」の開催を提案した (図5)。かほく市では, 産学官連携による地域イベントの開催は初めてであった。そのため, 事前に会議を重ねて話しあい, 役割分担を明確にして各々が「Win-Win」の関係になるよう組織を構築した。その結果, 表1に示すように, 開催事項を決定した。

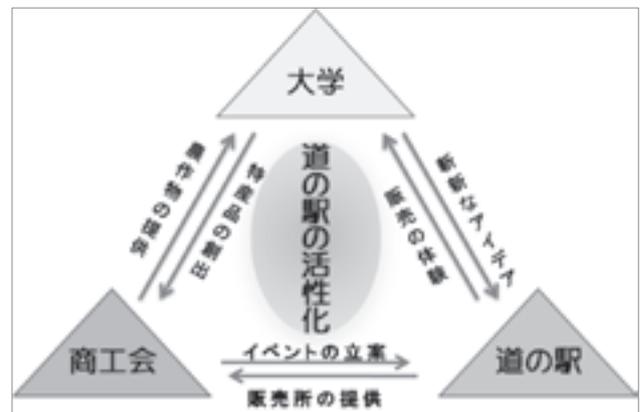


図4. 「道の駅活性化」に集う産学官の連携

表1. 地域イベントの開催事項

項目	決定事項	理由
目的	特産品市の開催	市民向け「かほくの魅力再発掘」
日時	9月23日(金・祝)9~12時	季節のよい行楽シーズン、祭り等の地域行事が比較的少ない
場所	道の駅高松レストハウス上り線	下り線に比べて市民はアクセスが楽
価格	通常の3割安	まずは、商品を知っていただく
演出	市のゆるキャラ出演	主に子どもを呼び込む



図5. キックオフを報ずる新聞 (北國新聞7月9日朝刊)

4. 調査研究の成果

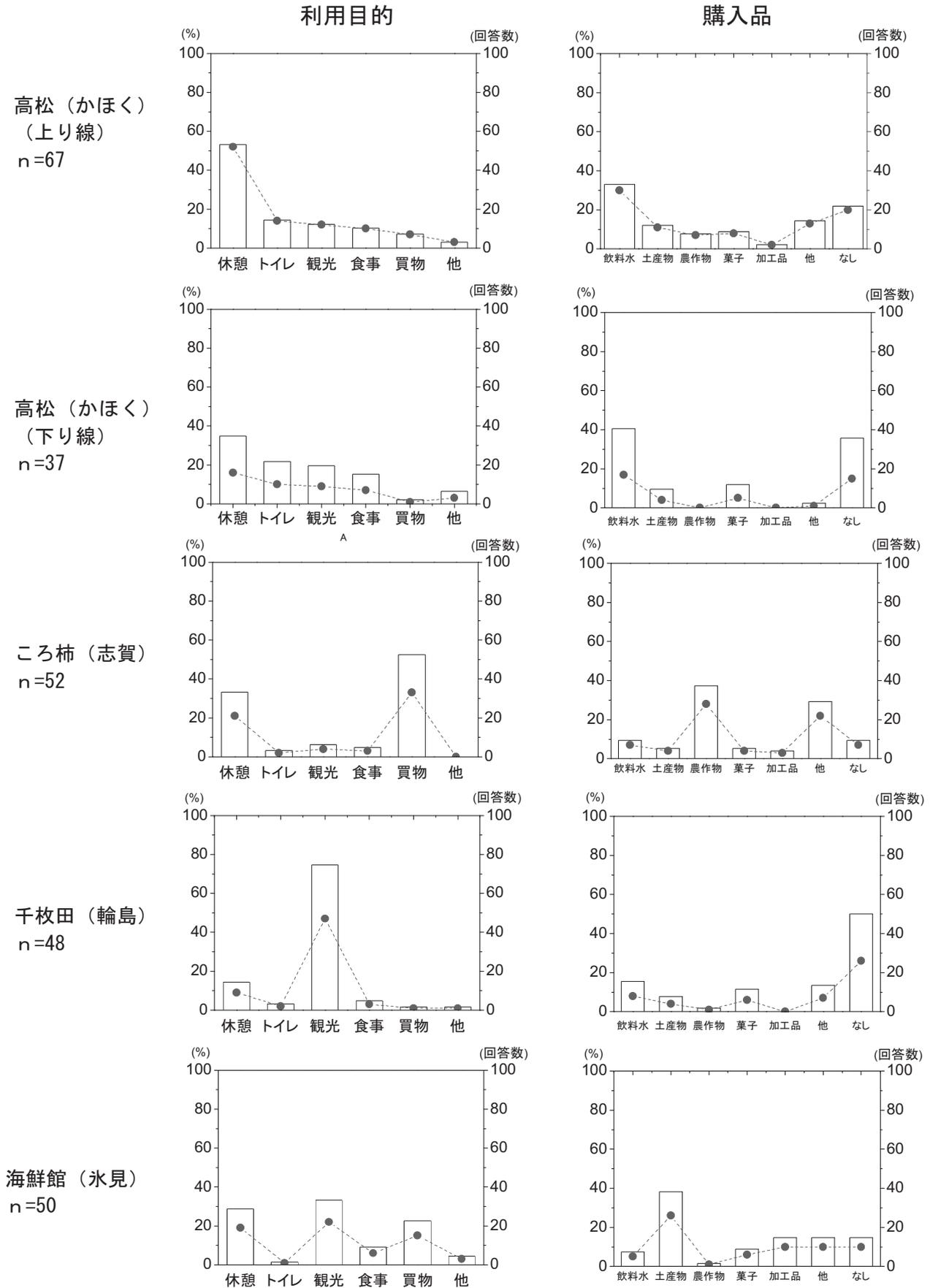


図 6. 道の駅の利用目的及び購入品の比較
棒グラフは割合, 折れ線グラフは回答数を表す

(1) 道の駅の利用に関する実態調査

道の駅の利用目的については、図6に示すように、立地条件が異なると目的は変化した。有料道路沿いの「道の駅高松」は、休憩の目的が最も多かった。これに対して、志賀町の市街地にある「ころ柿の里しか」では買い物物が、観光地千枚田に隣接する「千枚田ポケットパーク」では観光の利用目的が最も多かった。氷見市の市街地と観光地を併せ持つ「海鮮館」では観光と休憩の割合が多かった。

利用目的の相違に伴って、道の駅での購入品目は異なった。休憩の目的が高い「道の駅高松」は、飲料水とともに購入なしの割合が多かった。これに対して、「ころ柿の里しか」では農作物が、「氷見海鮮館」では土産物の割合が多かった。観光の目的が高い「千枚田ポケットパーク」では購入品はほとんどなかった。

利用頻度については、年2回以上訪れる者が「道の駅高松」と「ころ柿の里しか」は5割を越えたが、「千枚田ポケットパーク」では1割以下であった。

以上より、道の駅の立地条件が異なると利用者のニーズは変化することから、道の駅の差別化を図るビジョンを持つことが必要であるものと推察された。

(2) 地元特産物を活かしたスイーツの創作

創作したスイーツは「高松の夕日ゼリー」、「かぼちゃ入りピーチスープ」、「かぼちゃとさつまいもの串団子」であった。スイーツについて広く意見を伺うため、「森のアートフェスタ」(石川県県央農林事務所主催、9月10日)で試食会を開催した。その結果、「かぼちゃ入りピーチスープ」は女性に人気が高いことがわかった。併せて、図7に示すように、このようなスイーツの販路拡大を図るため、大学のホームページを通じてレシピを公開した。

(3) 地元住民を道の駅に呼び込むイベントの立案

平成23年9月23日(金・祝)に「かほくまいもん市」を「道の駅高松」で開催するとともに、以下の広報活動を行った(図8)。

- ・ 金沢ケーブルテレビネット・まちスタ530「いまドキッ!ベスト5」
- ・ かほく市ケーブルテレビ(ニュース情報)
- ・ 北國新聞(9月20日朝刊)
- ・ 市内のスーパー、公民館、保育園、図書館にポスター掲示

図8. イベント開催を報ずる新聞
(北國新聞9月20日朝刊)



図7. 創作したスイーツのレシピ



イベント当日は、大学がスイーツ、商工会が和菓子、高松レストハウスが蕎麦のブースをそれぞれ構えた。天候にも恵まれ、開店前から10名程度の集客があった。かほく市長や看護大学学長も応援に駆けつけた。観光客の客足は順調であったのに対して市民の客足はあまり伸びなかった。3時間の集客数は、看護大学のブースでは69名であり、売上げ数はぶどうゼリーは26品、団子は30品（完売）、スープは23品であった。



図9. 看護大ブースでの販売

5. 調査研究に基づく提言

道の駅の実態調査の結果、「道の駅高松」は高速道路のサービスエリアと類似した「通過客の休憩所」の機能を有していることが明らかになった。道の駅の機能は、「休憩」とともに「情報発信」と「地域連携」であるため、「道の駅高松」に人のにぎわいをもたらすためには、「情報発信」と「地域連携」も視野に入れた事業を今後展開する必要があると考えられる。

具体的には、農産物の直売または郷土の伝統食や伝統菓子の販売を提案したい。そこには地域の人々が登場し、道の駅に停泊する人々との交流が始まるからである。道の駅の活性化に関する研究では、農産物直売所に出荷することを通じて生産者のやる気が増したことや、道の駅のレストランで郷土食を提供することによって農村で新たな事業が進められたこと等が報告されている¹⁾。一方、

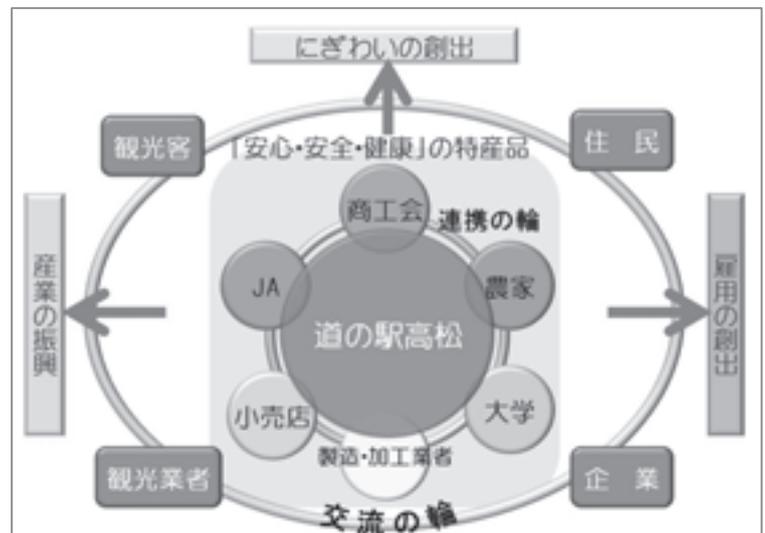


図10. 道の駅活性化による「人と人をつながり」の模式図

農村や中山間地域の活性化を促すものとして、「農産物直売所」、「農産物加工」、「農家レストラン」の3点セットが近年注目されている。幹線道路沿いの交通の利便性に優れた「道の駅高松」においても、このような3点をそろえて事業の活性化を図れる可能性があるものと推察される。そのためには、図10に示すように、道の駅を中心に、地場産物を生産する農家、それを活かした加工品を創作する大学、創作加工品の製造に関わる製造・加工業者、加工品の流通・販売を行う小売店、店舗の開設や宅配を行うJA、お金がまわる仕組みを整える商工会、そして消費者がチームを作り、「おらが道の駅高松」の応援体制を整えるという「地域連携」を構築することが重要となる。さらには、このような連携団体がメディアやマスコミを通じて、住民、観光客、観光業者、企業を「道の駅高松」へ呼び込み交流を促す「情報発信」も重要となる。私たちゼミでは、このようなプロジェクトを通じて、地域社会の「人と人のつながり」の再生を図りたいと考えている。

6. 調査研究の自己評価

今年度の達成目標の3つをほぼ達成した。

参考文献・資料

大西達也：地域の食材にこだわる地域産業の拠点「道の駅むなかた」．地域開発，558，42-47，2011．